



日本の雨技術を世界に発信!
雨の国際会議 in エジンバラに参加して

参加して
得たものは

国際学会入門



長岡技術科学大学 修士2年 伊藤 梓

1 初めての国際学会

9月初旬のスコットランドのエジンバラは晴れ時々小雨。どっと降る雨は少なく、ひと時のあいだちょっと雨宿りをするか、もしくはジャンパーを着用する程度が地元の人々の標準らしい。エジンバラはキレイに敷き詰められた石造りの建物と石畳の舗装が統一された古い街並み、それに遠くから見ると、ところどころに突き出た教会が特徴的な街。

私は恥ずかしながら、24歳になって海外に渡るのも国際学会に参加するのもこれが初めて。この学会に参加するために、英語論文を作成し、学会参加の申し込みをし、宿泊先の手配など四苦八苦しながら準備を半年ほど前から進めてきた。英語論文の作成は手間取ったどころの話ではなく、何度も何度も書き直し、先生にも喝を入れられながらようやく完成させたものだった。

このような苦戦を強いられたこともあり、学会が近づくにつれ、参加への期待と不安が徐々に大きくなっていった。先に結論を言ってしまうと、人より少し苦戦してよかったと思える学会参加であったことは間違いない。

2 “真のエンジニア” との出会い

この学会には、長岡技術科学大学からは私と姫

野修司准教授で参加した。現地では過去何度もこの学会に参加した藤田昌一先生と合流し、先生のサポートを受けながら著名人の講演や私の研究に関係ある口頭発表を聞いて回った。

今回、私の発表は「ボルテックスセパレーター（渦流で下水中の固形物を除去する無動力メンテナンスフリーのCSO・雨水対策装置）の性能評価」に関するポスター発表。ボルテックスセパレーターは海外では多く採用されているが、日本ではその性能評価が不十分であり、採用された例は極めてわずか。そこで、私たちが実際に日本の下水処理場にボルテックスセパレーターを設置し、その効果を検証した成果を報告することとした。

この学会は、さらに研究を進めるうえで世界の技術者にアドバイスをもらうチャンスでもあり、日本でもこのような取り組みをしているといった主張にもなる。実際に、私の発表当日、ボルテックスセパレーターの研究開発を行うドイツのUFT (Umwelt-und Fluid-Technik) 社のバイス (Gebhard Weiss) 博士が私のブースに訪れ、その性能や海外での問題点について意見交換を行った。片言の英語の私に対してバイス博士はジェスチャーとペンで、さらにはその場で電卓を持ち出し、実経験からしか得ることができないノウハウを基に、さまざまなことを教えてくださった。この電卓を靴から取り出し計算を行う行為には、私も先生も「これぞエンジニア！」と本当に感心させら



■攻めてくるバイス (Gebhard Weiss) 博士
(右) にタジタジ



■ホテルから会場へ行く途中 (左から筆者、
姫野准教授、藤田客員教授)

れた。また、一番に心配していた言葉の壁はなんとかあった、というよりは、なんとかしていただいたと言ったほうが正しい。しかしながら、これまで言葉の壁はとてつもないものだと思っていたが、大切なのは「なんとか伝えようとする事」なのだ、ここで学ぶことができた。

一方、基調講演や興味のある発表は時間が許す限り聴講に行くようにした。しかし、海外の方々の発表は私には流暢すぎるために全部は聞き取れないので、スライドの活字や写真から読み取るように努めた。

3 学会の話題

学会での話題は、CSOとノンポイント汚濁のモニタリングやその対策技術、流出解析モデルの活用、アセットマネジメントとさまざまであったが、なかでも近年の気候変動に伴う雨水問題が大きな話題として取り上げられていた。

基調講演をはじめ、複数の発表で衝撃的な浸水被害のようすが写し出された。さらには、この学会参加者に何か訴えかけるように、開催期間中には記録的な降雨によりイギリス各地で浸水被害が起きているというニュースが報道されていた。これを見て、世界中でこれまでの計画では対処しきれない降雨が発生し、これに適應する雨水対策が

求められていることを知った。

他国でも浸透や貯留といった雨水対策技術は多いものの、ハザードマップやRTCは日本が先進的に取り組んでいるように感じられた。

4 旅の恥をムダにするまい

旅の恥をムダにするまい——。今回の学会に向かう前、決心したことである。片手に電子辞書を持ち片言の英単語を並べしゃべろうとする姿も、ディナーの際にダンスの相手を探す必死さも、街のあちこちをなりふりかまわず写真撮影する姿も、周りから見たら少し滑稽だったかもしれない。

しかし、24歳の今だからこそ思い切って経験できることがあるはず。この気持ちを忘れずに、何事も前向きに実感できたことが大きな収穫であった。また、ここで得た知識や経験を研究活動や今後待ち受ける社会生活で活かしていきたいと思った。その第一歩として、エジンバラで出会った日本の方々やさまざまな国の技術者たちとこれからも交流を続けていきたいと思う。

最後に、このような貴重な経験ができたのは、学会の準備や現地での指導など、周囲の皆様からの温かいご支援があったからである。

私を支えてくださった皆様に心から感謝しています。